

大阪大学北米拠点設立 10 周年



海外交流

樺澤 哲*

10th Anniversary of Osaka University's Global
Arm in North America

Key Words : Global Arm, Global Innovation Community,
International Communication, Alumni Network

小職は、本年4月、大阪大学北米センター（旧サンフランシスコ教育研究センター、英語名：North American Center for Academic Initiatives、<http://osaka-u-sf.org/ja/>）のセンター長（4代目）を拝命致しました。本稿では、北米拠点10年間の歩みを俯瞰し、昨今の北米センター事情、取組状況と今後の計画について述べさせていただきます。

1. はじめに

皆様のお蔭をもちまして、大阪大学北米拠点は、本年で設立10周年を迎えるに至りました。折良く、平野総長は本年の年頭挨拶で、本年を「GLOBAL UNIVERSITY『世界適塾』元年」と位置付け、世界適塾の姿を「世界中から大阪大学に集まった志のある学生が、大阪大学で学び世界に羽ばたいてゆく」と定義しました[1]。また、平野総長は、「適々のところ」（自分の心にかなう（適する）ところを楽しむ（適する））という「適塾精神」[2]の原点を「地域に生き世界に伸びる」と述べています[3]。設立10周年を機に、「適塾精神の原点」を全米地域へ展開して大阪大学のプレゼンスを北米地域から世界へと輝かせ、「世界が大阪大学を目指す国際戦略」を遂行するために、拠点名を大阪大学北米センター（North American Center for Academic Initiatives, Osaka University）と改めました。

2. 北米拠点10年の歩み [4][5][6]

北米拠点は、2004年5月に北米地区における教

育研究拠点としてサンフランシスコ市内に開設され、以下に示した5つの役割[4]を掲げて活動してきました。

【役割1】研究者交流・学生交流の促進およびそのための情報収集・情報発信拠点

2004年9月に拠点開設記念シンポジウムとして、宮原元総長他、大阪大学21世紀COEプログラムリーダーによる14テーマについての講演を実施しました。2005年9月にはシリコンバレーで、工学研究科の河田聡教授及びアメリカの大学との共同研究を行っている現地企業のトップの方々を講師に招き、ナノテクノロジーに関するセミナーを主催しました。2006年12月には第6回大阪大学フォーラム：Frontier of Biomedical Research and Beyondを、宮原元総長および岸本元総長他の来訪を得て、サンディエゴで実施しました。2008年12月には、第8回大阪大学フォーラム：Osaka University Forum in San Francisco “Bio-Environmental Chemistry”を、鷲田元総長他の来訪を得て、サンフランシスコで実施しました。

また、2010年の夏季休暇からは、University of California（以下、UC）Davis (extension)での夏季工学英語研修の機会に、UC Berkeley International House 学生との日米学生交流会を実施しています。また、秋の大学祭の頃に、関係部局の協力を得て、大学院生を対象として、UC BerkeleyやStanford大などサンフランシスコ近郊の大学生・大学院生との未来科学技術開拓ワークショップ（2013年からはソーシャルイノベーションワークショップ）[通称：



* Satoshi KABASAWA

1952年1月生
大阪大学大学院工学研究科通信工学専攻
博士後期課程修了（1980年）
現在、大阪大学 海外拠点本部 北米センター センター長
工学博士 通信工学
TEL：+1-415-296-8561
FAX：+1-415-296-8676
E-mail：kabasawa@osaka-u-sf.org

新成臨丸プロジェクト]を実施しています。

【役割2】遠隔講義や語学研修実施支援をはじめとする国際教育拠点

夏季休暇中の4週間に、「工学英语」(理工系大学院生対象として専門分野における英語習得)、「一般英語」(学部生対象として英語の基礎を習得)、「歯学英语」(歯学研究科大学院生および研修医対象として専門分野における英語習得及び歯科治療現場の視察)の3つを実施しています。高等司法研究科大学院生の米国大学等での司法関連講習受講及び交流会参加への支援も実施しています。

2005年度から、前期は「世界は今—サンフランシスコから」と題して、在サンフランシスコ日本国総領事をはじめ米国のさまざまな分野の第一線で活躍中の方々による遠隔講義を実施しています。また、2006年度後期から、Critical Thinking, Discussion (and Brain Storming) in English を目標として、英語での遠隔講義も開始しました。いずれの遠隔講義においても、履修生と講師とのインタラクティブなスタイルで実施しています。加えて、2011年度後期からはアメリカの有力大学から講師を招き英語による集中講義も実施しています。

【役割3】APRU (Association of Pacific Rim Universities、環太平洋大学協会)等の国際的大学連合や他大学との共同シンポジウム開催支援等の国際共同研究拠点

2006年4月にサンフランシスコにおいて、大阪大学とUC Berkeleyとが共同で、APRU/AEARU (Association of East Asian Research Universities、東アジア研究型大学協会)地震シンポジウムを共催しました。大阪大学総長、UC Berkeley代表、シンガポール国立大学副学長他の出席の下で活発な議論が行われました。一部の講演は公開講演として市民に無料公開され、米国市民に大阪大学をアピールする機会となりました。

【役割4】学術交流協定および研究機関・企業との産学連携をはじめとする交流ステーション

NAFSA (Association of International Educators、国際教育交流協議会)等の国際的な会議に積極的に参加し大阪大学の教育研究活動の紹介をしています。UCをはじめとする交流協定締結校を訪問して学生や研究者交流を促進すると共に、UCの各キャンパスが開催するSAF (Study Abroad Fair、留学フェア)

にも参加して、大阪大学が提供する国際プログラムの広報活動も実施しています。

2004年に米国内に拠点を持つ日本の大学間の連携促進を目的として結成されたJUNBA (Japanese University Network in the Bay Area、サンフランシスコ・ベイエリア大学間連携ネットワーク) [6]の設立メンバーとして、継続してボードメンバーを務めています。日本の大学の国際化、国際的人材の養成、産学連携等の活動を支援し、日本及び米国における教育・研究の発展と産業創出に寄与する活動にも貢献しています。

また、ジャパン・ソサイエティや大阪—サンフランシスコ姉妹都市協会をはじめとする現地のコミュニティに参画して交流ネットワークを広げ、北米地域における大阪大学のプレゼンス向上に取り組んでいます。

【役割5】北米在住の同窓生への情報提供や交流支援を行うアラムナイ・センター

2006年1月、社会的ネットワーク活動やビジネスネットワーク活動を通じて北米在住の同窓生のつながりを強めるために、大阪大学北米同窓会が設立されました。事務局(長)は北米センター(長)が兼務しています。地区(支部)は、NY地区、ワシントンDC地区、シカゴ地区、LA地区、SF地区の5地区に加え、2013年よりアトランタ地区、トロント(カナダ)地区、シアトル地区の3地区が加わり、全体で8地区となりました。2013年7月20日には、ニューヨークにて、平野総長出席の下、IMF独立評価室の高木信二大阪大学名誉教授、加藤友朗コロンビア大学医学部外科学教授を迎えて、「大阪フレンズナイト」と題した特別講演会及び同窓会を開催しました。現在、北米(米国・カナダ)を対象として、500名余りの登録(その内約50名が帰国留学生・社会人)を得ています。(登録には北米同窓会事務局: info@osaka-u-sf.orgへ連絡ください。)

3. 北米センター事情と取組現状および計画

北米センターは、設立以来のオフィスから、2014年6月1日付にて新オフィス(44 Montgomery St.)へ移動(写真参照)しました。

Twitter (<https://twitter.com/>) や Square Inc. (<https://squareup.com/>) 等の昨今のネットベンチャーや、TechShop (<http://www.techshop.ws/tssf.html>)



図1. 新オフィスは当該ビルの35階

等のコワーキング・スペースの急増に伴うジェントリフィケーション (Gentrification) [8] の余波を受けて、新オフィスへの移動を余儀なくされました。

さて、北米センターは、本年6月に、連携協定校であるUCの Education Abroad Program (EAP) と同校の大阪オフィス開設の覚書の締結を推進して、豊中キャンパスに新築された文理融合棟内にUC EAP オフィス開設を実現しました。同オフィスは、UCEAPの学生、教職員に限らず、UC全体として活用されるようになっており、夏季J-ShIP (Japanese Short-stay In-session Program) 等、大阪大学の学生諸君のUCへの留学相談を初め、mini-Frontier Lab at Osaka University の2015年度開始 (協議中) 等が期待できます。

遠隔講義や北米同窓会など、これまでの資産を更に充実させると共に、前述の5つの役割をベンチマーキングしつつ、北米地域の特徴に着目して役割の重付けをしながら、北米地域における研究者・学生交流のための情報収集・情報発信、北米地域の主要大学との交流の支援、大阪大学の研究成果の広報、北米地域の研究成果との迅速な連携等の機能を発揮してまいります。まずは、UC との連携協定における活動の見える化に取組み、同時に、イノベーションが先進的に展開されるサンフランシスコ地域における新機能の提案にも取組んでまいります。そして、2020年の大阪大学の目標数値 (表1) の達成に貢献してまいります。

表1. 2020年の目標数値

| |
|---------------------|
| 学部留学生：現在の 4%を10%に |
| 大学院留学生：現在の 15%を25%に |

4. おわりに

小職は、1980年に工学研究科通信工学専攻博士課程を修了、松下電器産業株式会社 (現、パナソニック株式会社) の本社研究開発部門にて新技術の研究開発を担当しました。研究開発マネジメント等を担当して、2012年1月に定年退職しました。その後、大阪大学にて特任教授として、産学連携、イノベーションおよびアントレプレナーシップに関わる教育研究活動に携わる機会を得て、今に至りました。サンフランシスコ地域は、1998年から6年間のシリコンバレーでのコーポレート・ベンチャー・キャピタル [10] に取組んでおりました頃から丁度10年ぶり、2度目の勤務です。

イノベーション人材が世界中から集う北米西部地区にある北米センターは、本学にとって、世界のイノベーション・コミュニティへのゲートウェイと言えます。当該ゲートウェイを流れる世界のイノベティブな教育研究活動情報を、適宜、関係部局等へ発信致します。学生、研究者、教職員が、発信された情報を受けて自らのグローバルな位置付けを把握し持てるポテンシャルを最大限発揮できる環境を、提供したいと考えています。

なお、8月30日には、サンフランシスコ市内で、平野総長のご臨席を得て、国際医療センター [11] 開設1周年記念講演会との共催で、北米センター10周年記念講演会 & 北米同窓会総会を開催いたします。(本稿がお手元に届くころには当該講演会は開催後となりますこと、ご容赦下さい。別の機会に状況など報告させて頂きたく考えております。)

引き続き、よろしくご支援、ご指導のほどお願い申し上げます。

参考情報・文献等

- [1] http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/president/president_message/files/20140106.pdf (2014年6月8日アクセス)
- [2] 適塾特別展示チラシ「大阪大学創立80周年にあたって 継承する適塾の精神」

- (http://www.osaka-u.ac.jp/ja/news/event/2011/05/20110531_1)
(2014年6月8日アクセス)
- [3] http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/president/2011_2013/talk
(2014年6月8日アクセス)
- [4] <http://www.osaka-u.ac.jp/jp/international/iab/overseas.html>
(2014年6月8日アクセス)
- [5] 久保井亮一, 大阪大学サンフランシスコ教育研究センター便り — 「咸臨丸」太平洋横断150周年と早期留学の勧め(2), 生産と技術 第63巻第1号, pp.92-95 (2011)
- [6] <http://www.junba.org/>
(2014年6月8日アクセス)
- [7] <http://osaka-u-sf.org/ja/alumni/>
(2014年6月8日アクセス)
- [8] 例えば, <http://pc.nikkeibp.co.jp/article/column/20140130/1119743/?rt=nocnt>
(2014年6月8日アクセス)
- [9] <http://ex.isc.osaka-u.ac.jp/shortstay-programs/JShIP/JShIP2013Flier.pdf>
(2014年6月8日アクセス)
- [10] 樺澤 哲, エレクトロニクス分野における技術ベンチャリング — コーポレート・ベンチャー・キャピタルによる開発加速と R & Dアウトソーシング —, 研究 技術 計画 Vol.26, No.3/4, pp.143-160 (2011)
- [11] 国際医療センターホームページ
(<http://www.dmi.med.osaka-u.ac.jp/cgh/ja.html>)
(2014年6月8日アクセス)

